

日本の名作名文ハイライト

# 山椒大夫

森鷗外

朗読

suzuka

出所

すずきはるわ

<http://www.voiceblog.jp/clarte9/>

teabreak 編

# 山椒大夫 森鷗外

## ●冒頭場面

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群れが歩いている。母は三十歳を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてくる。姉は十四、弟は十二である。それに四十ぐらいの女中が一人ついて、くたびれた同胞二人を、「もうじきにお宿にお着きなさいませ」と言って励まして歩かせようとする。二人の中で、姉は足を引きずるようにして歩いているが、それでも気が勝つていて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折り折り思い出したように弾力のある歩きつきをして見せる。近い道を物詣りにでも歩くのなら、ふさわしくも見えそうな一群れであるが、笠やら杖やらかいがいしい出立ちをしているのが、誰の目にも珍らしく、また気の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の断えたり続いたりする間を通っている。砂や小石は多いが、秋日和によく乾いて、しかも粘土がまじっているために、よく固まっています、海そばのように裸を埋めて人を悩ますことはない。

蕁茸きの家が何軒も立ち並んだ一構えが柞の林に囲まれて、それに夕日がかつとさしているところを通りかかった。

「まああの美しい紅葉をござらん」と、先に立っていた母が指さして子供に言った。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも言わぬので、女中が言った。「木

の葉があんなに染まるのでございませぬから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませぬね」

姉娘が突然弟を顧みて言った。「早くお父うさまのいらっしやるところへ往きたいわね」

「姉えさん。まだなかなか往かれはしないよ」弟は賢しげに答えた。

母が諭すように言った。「そうですね。今まで越して来たような山をたくさん越して、河や海をお船でたびたび渡らなくては往かれないのだよ。毎日精出しておとなしく歩かなくては」

「でも早く往きたいのですもの」と、姉娘は言った。

「群れはしばらく黙って歩いた。

向うから空桶を担いで来る女がある。塩浜から帰る潮汲み女である。

それに女中が声をかけた。「もしもし。この辺に旅の宿をする家はありませんか」

潮汲み女は足を駐めて、主従四人の群れを見渡した。そしてこう言った。

「まあ、お気の毒な。あいにくなところで日が暮れますね。この土地には旅の人を留めて上げる所は一軒もありません」

女中が言った。「それは本当ですか。どうしてそんなに人氣が悪いのですよ」

二人の子供は、はずんで来る対話の調子を気にして、潮汲み女のそばへ寄ったので、女中と二人で女を取り巻いた形になった。

潮汲み女は言った。「いいえ。信者が多くて人気のいい土地ですが、国守の掟だからしかたがありません。もうあそこに」と言いさして、女は今来た道を指さした。「もうあそこに見えています、あの橋までおいでなさると高札が立っています。それにくわしく書いてあるようですが、近ごろ悪い人買いがこの辺を立ち回ります。それで旅人に宿を貸して足を留めさせたものにはお咎めがあります。あたり七軒巻添えになるそうです」

「それは困りますね。子供衆もおいでなさるし、もうそう遠くまでは行かれませんか。どうかしようはありますまいか」

「そうですね。わたしの通う塩浜のあるあたりまで、あなた方がおいでなさると、夜になってしまいました。どうもそこらでいい所を見つけて、野宿をなさるよりほか、しかたがありますまい。わたしの思案では、あその橋の下にお休みなさるがいいでしょう。岸の石垣にぴったり寄せて、河原に大きい材木がたくさん立ててあります。荒川の上から流して来た材木です。昼間はその下で子供が遊んでいます、奥の方には日もささず、暗くなっている所があります。そこなら風も通しますまい。わたしはこうして毎日通う塩浜の持ち主のところにあります。ついその柵の森の中です。夜になったら、藁や薦を持って往ってあげましょう」

子供らの母は一人離れて立って、この話を聞いていたが、このとき潮汲み女のそばに進み寄って言った。「よい方に出逢いましたのは、わたしどもの為合せでございます。そこへ往って休みましょう。どうぞ藁や薦をお借り申しと

うございます。せめて子供たちにも敷かせたりきせたりいたしとうございます」

潮汲み女は受け合って、柞の林の方へ帰って行く。主従四人は橋のある方へ急いだ。

### ●最終場面

関白師実の娘といったのは、仙洞にかしずいている養女で、実は妻の姪である。この後は久しい間病気でいられたのに、厨子王の守本尊を借りて拜むと、すぐに拭うように本復せられた。

師実は厨子王に還俗させて、自分で冠を加えた。同時に正氏が謫所へ、赦免状を持たせて、安否を問いに使いをやった。しかしこの使いが往ったとき、正氏はもう死んでいた。元服して正道と名のっている厨子王は、身のやつれるほど嘆いた。

その年の秋の除目に正道は丹後の国守にせられた。これは遥授の官で、任国には自分で往かずに、掾をおいて治めさせるのである。しかし国守は最初の政として、丹後一国で人の売り買いを禁じた。そこで山椒大夫もことごとく奴婢を解放して、給料を払うことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のように思ったが、このときから農作も工匠の業も前に増して盛んになって、一族はいよいよ富み栄えた。国守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、国守の姉をいたわった小萩は故郷へ還された。安寿が亡きあとにはねんごろに弔われ、また入水

した沼の畔には尼寺が立つことになった。

正道は任国のためにこれだけのことをしておいて、特に仮寧を申し請うて、微行して佐渡へ渡った。

佐渡の国府は雑太という所にある。正道はそこへ往って、役人の手で国中を調べてもらったが、母の行くえは容易に知れなかった。

ある日正道は思案にくれながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道にかかった。空はよく晴れて日があかあかと照っている。正道は心のうちに、「どうしてお母あさまの行くえが知れないのだろう、もし役人なんぞに任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神仏が憎んで逢わせて下さらないのではあるまいか」などと思いながら歩いている。ふと見れば、大ぶ大きい百姓家がある。家の南側のまばらな生垣のうちが、土をたたき固めた広場になっていて、その上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈り取った粟の穂が干してある。その真ん中に、檻樓を着た女がすわって、手に長い竿を持って、雀の来て啄むのを逐っている。女は何やら歌のような調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、この女に心が牽かれて、立ち止まっただけでいた。女の乱れた髪は塵に塗れている。顔を見れば盲である。正道はひどく哀れに思った。そのうち女をつぶやいている詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて来た。それと同時に正道は瘡病のように身うちが震って、目には涙が湧いて来た。女はここの調子を繰り返してつぶやいていたのである。

安寿恋しや、ほうやれほ。

厨子王恋しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、

疾う疾う逃げよ、逐わずとも。

正道はうっとりとなって、この詞に聞き惚れた。そのうち臓腑が煮え返るようになって、獣めいた叫びが口から出ようとするのを、歯を食いしばってこらえた。たちまち正道は縛られた縄が解けたように垣のうちへ駆け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつつ、女の前に俯伏した。右の手には守本尊を捧げ持って、俯伏したときに、それを額に押し当てていた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知った。そしていつもの詞を唱えやめて、見えぬ目でじっと前を見た。そのとき干した貝が水にほとびるように、両方の目に潤いが出た。女は目があいた。

「厨子王」という叫びが女の口から出た。二人はぴったり抱き合った。